



子どものとき、みんなと遊んでいても、その輪からはずれてしまうことがあった。
勉強^{べんきょう}していて、集中^{しゅうちゆう}がとぎれてしまうことがあった。

そんなとき、ふと思^{おも}う。

ぼくは、何を^{なに}しているのだろう。

どうしてここに^{こゝ}いるのだろう。

ほかの子とくらべて、
運動が特別できるわけでもない、
歌を歌うことや、楽器をひくのが
うまいわけでもない。

ほくは、
何をするために生まれてきたのかな。

親に「どうしてわからないの」と、
きつく言われたとき、
先生に「何をやっているんだ」と
怒られたとき、
どうしたらいいか、わからなくなった。

ほくって、いったい何なのだろう？
ほくが、のびのびと生きられる場所。
そんな「自分の場所」ってあるのかな。



心のどこかで、自分の場所、生きる意味をさがしながら、ぼくは大きくなった。
とにかく、何でもやってみた。

知らない土地へいけば、答えが見つかると思って、
大学生になると、世界のあちこちへ出かけた。

そのときに撮った写真を、「うまい」とほめられ、
「よし、写真家になるぞ!」と、カメラを手に世界を駆けめぐった。

中央アジアの
アフガニスタンでは、
何十年もの間、
戦いが続いてきた。

破壊された市街で、
物を売る少年。
その屋台の上に、
きれいな鳥が
飼われていた。

戦火の中でも、
人は美しいものを求め、
大切なものを
失うまいとしている。

ほくにとつて、
戦地にいき、
その中で生きる人びとに
出会ったことは、
「人が生きる」って、
どういふことを考える、
大きなきっかけになった。



東ヨーロッパ、バルカン半島にあるコソボでも、セルビアからの独立を願う戦いが続いた。家に火がかけられ、窓枠だけが残った。



でも、その向こうにはカモミールが咲き乱れ、野原で遊ぶ子どもたちの声が、ひびいていた。戦場でも、人は生きていく。人間って、そう簡単にはへこたれない。たくましく、強いものなのだ、と思った。